

現代日本語における格の暫定的体系化

菅井三実

0. はじめに

本稿の目的は、現代日本語における対格(ヲ格)・与格(ニ格)・奪格(カラ格)・具格(デ格)の相対的な位置関係を、意味的な観点から提示することにある。第1節で、対格を中心する与格と奪格の相互関係を明らかにし、第2節で、与格が、程度差をもちながらも《一体化》という概念によって一元化されることを示す。第3節では、具格が事象を通じて主格や対格との変化を被らないことを明らかにした上で、対格・与格・奪格・具格と併せた暫定的な体系化を提示したい。^[1]

1. 対格・奪格・与格のスキーマ的规定

第1節では、経験的なイメージスキーマを援用して、意味的な観点から「ヲ格」を中心に「カラ格」と「ニ格」を併せた特徴づけを提示する。

一般に、対格の用法を列挙するというとき、細かく見れば多くの区分も可能であるが、大雑把に言えば次の5つに整理できる。

- | | | |
|---------|--------------------------------------|------|
| (1) (a) | 太郎がリビングで夕方までテレビをを見ていた。 | [対象] |
| (b) | 太郎が健康のために公園を自転車 ^を で走っている。 | [経路] |
| (c) | 太郎が急用で部屋を出て行った。 | [起点] |
| (d) | 太郎が学生時代にカナダで3週間を過ごした。 | [時間] |
| (e) | 雨の中を太郎が病院まで見舞い ^を に来てくれた。 | [状況] |

このような意味の多様性ゆえに「ヲ格」を意味的に特徴づけることは不可能のように思われるかもしれない。しかしながら、形式の意味が体系の中で相対的に規定されるという常識的な観点から言えば、次の例が示すように「ヲ格」は「ガ格」の対極にあって、かつ「カラ格」と「ニ格」の間に位置づけられることが分かる。

- | | |
|---------|----------------------------------|
| (2) (a) | 社長が京都から大阪に支店 ^を 移した。 |
| (b) | 太郎が花子 ^を を係長から課長に抜擢した。 |

(a)で、「移す」という事象において働きかけを受ける側の対格「支店」は働きかけを与える側の主格「社長」と対峙する関係にあり、しかも、空間的に奪格の「京都」と与格の「大阪」の中間に位置づけられる。同様に、(b)のような抽象的な変

化においても対格の「花子」は奪格の「係長」と与格の「課長」の間に位置づけられることになる。

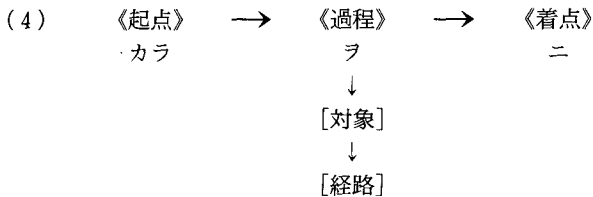
同様のことは、空間次元の[経路]についても言える。

(3)(a) 太郎が東京から国道1号線を大阪に向かった。

(b) 宇宙の彼方から彗星が軌道上を地球に接近しています。

(a)において、下線部の「国道1号線」は、奪格の「東京」と与格の「大阪」の中間で「太郎」が位置する空間的領域を指定するものとして分析される。(b)についても同様である。

このとき、Johnson(1987:113-117)などにならって、奪格による《起点(source)》と与格による《着点(goal)》を結ぶ「イメージスキーマ(image schema)」を想定し、2つの点の間を独自に《過程(process)》と名付ければ、[対象]の対格は《過程》上にあるモノをコード化するということができ、次のように図示される。



(4)の図式は、よく知られた《SOURCE-PATH-GOAL SCHEMA》を基本に据えつつも、中間部の《経路(path)》を《過程(process)》に変更したものであり、格との対応は《起点》《過程》《着点》が各々「カラ格」「ヲ格」「ニ格」で実現される。

このように、[対象]と[経路]をスキーマ上の《過程》から導き出すことによって、なぜ[経路]が「ヲ格」で標示されるかという素朴な問いにも自然な論理で答えることができる。すなわち、移動においては[経路]こそが空間的な《過程》部分にほかならないからである。

次に、対格による[起点]の標示に考察を進めたい。考察対象となる具体的な言語現象として、次のペアが示すように、動詞が「離脱」の概念を含むとき[起点]の格標示は奪格と対格で交替が許される。

(5)(a) 生まれた町から太郎が出た。

(b) 生まれた町を太郎が出た。

つまり、対格には奪格と同様に[起点]を標示することができるが、このとき重要なのは、対格による[経路]と[起点]が相補的に分布するという点である。具体的に言えば、対格で[経路]を実現し得るとき対格は常に[経路]を実現し[起点]を実現する

ことはなく、逆に、対格が[起点]を実現し得るのは対格が[経路]を実現し得ないときに限られるというのが本稿の分析である。その論拠は、次の例が示すように、動詞が対格で[経路]を実現し得るとき対格が決して[起点]を標示し得ないことに求められる。

- (6)(a) 国道を帰った。 [経路]
 (b) 大阪から帰った。 [起点]
 (c) * 大阪を帰った。 [起点]

すなわち、動詞「帰る」は(a)のように[経路]を対格で標示し得る動詞であるから、対格は常に[経路]として解釈され、したがって、[起点]は(b)のように奪格で標示すべきであって、下線部の「大阪」は[起点]と解釈する限り(c)のように対格で標示することはできない。かくて、その動詞の格フレームにおいて、[経路]が実現可能のとき対格は常に[経路]としてのみ解釈され、決して[起点]と解釈され得ないといえることができる。これにより、空間次元において、対格は[経路]と[起点]を相補的に標示することが確認されたと思われる。

また、Heine, *et al.* (1991:157)などで提示されている隠喩的拡張の階層図から正しく予測される通り、対格にも空間から時間への拡張が観察される。

- (7)(a) 山中の険しい道を必死に駆け抜けた。 [経路]
 (b) 1990年代の前半を必死に駆け抜けた。 [時間]
 (c) 1990年代の前半を静かにカナダで過ごした。 [時間]

ここから(a)(b)(c)の順に「空間から時間へ」の滑らかな拡張が確認されよう。まず、(a)から(b)にかけては、同一の述語をとりながら、下線部のNPが「空間」から「時間」へ変更されることで意味解釈も[経路]から[時間]に推移する。また、(a)や(b)の述語動詞には空間的な移動の意味が残っているが、(c)のように述語の語彙的な意味から空間的な側面がなくなることで、全体として[時間]の解釈が自然になる。

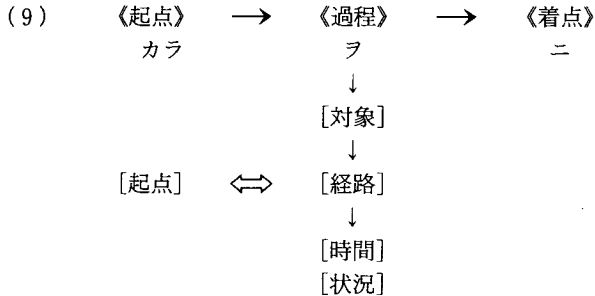
さらに、[経路]や[時間]の延長線上に位置づけられるのが[状況]である。

- (8)(a) 花子は雨の中を傘もささずに立ち続けた。
 (b) お忙しいところを、わざわざ有り難うございました。

このとき、下線部の逐語的な構成を見ると、対格成分は「中」や「ところ」のような空間名詞が主要名詞になっているので、[状況]への拡張においては直接のソースを[時間]と考えるより、空間的な[経路]からの隠喩的拡張と考える方が適切であろうと思われる。

かくして、[状況]を含めて対格の意味役割を総合的にネットワーク化すれば、最

終的に次のような姿になる。



この図で[起点]と[経路]の間に両方向矢印の↔を付したのは、[経路]と[起点]が相補的に機能することを反映しての措置である。また、[時間]と[状況]の間に矢印↓を入れなかったのは、上述のように、[状況]が[時間]を直接のソースとして拡張したわけではなく、むしろ[状況]は[時間]と同様に空間からの拡張と分析されることに基づくものである。これによって、対格は、すべての用法において、奪格および与格との相対関係が示された。

2. 二格の基本的修飾機能

第2節では「二格」の意味役割を概観し、機能的な修飾関係を確認する。

与格の意味役割は極めて多様であって、実際、いくつの意味役割を設定するかに関してさえ見解は一致していない。最も多いところでは、国立国語研究所(1997: 119-165)が延べ27の深層格を認めているが、本稿では、体系的な整理を見越し、次のように都合14の用法を設定しておくことにする。

- | | | |
|----------|------------------------------|-------|
| (10) (a) | 針金を内側に <u>曲</u> げる。 | [方向] |
| (b) | 壁にボールを <u>投</u> げる。 | [到着点] |
| (c) | 壁にペンキを <u>塗</u> る。 | [密着点] |
| (d) | 調味料をスープに <u>入</u> れる。 | [収斂先] |
| (e) | 研究室に <u>学</u> 生がいる。 | [存在点] |
| | | |
| (11) (a) | 花子を <u>食</u> 事に <u>誘</u> った。 | [目的] |
| (b) | 子供に <u>英</u> 語を <u>教</u> える。 | [伝達先] |
| (c) | 絵の才能に <u>恵</u> まれる。 | [要素] |
| (d) | 太郎が社会人にな <u>っ</u> た。 | [結果] |
| (e) | 貴方にも一軒家を持て <u>ま</u> す。 | [経験者] |

- | | |
|----------------------|-------|
| (12) (a) 親友にノートを借りる。 | [起点] |
| (b) 余りの熱さに花子は気を失った。 | [原因] |
| (c) 先生に論文を批判される。 | [動作者] |
| (d) 3時に待ち合わせする。 | [時間] |

ここで、(10)～(12)の3つのグループに分けたのは便宜上の分類に過ぎず、本質的なものではない。(10)(a)～(e)の5つは空間次元の用法であり、(11)(a)～(b)の5つは非空間次元の用法で、(10)の5つと並行的に整理できるとの見通しをもっている。(12)は、やや周辺的な用法をまとめたものであるが、詳細については紙幅の都合上、割愛する。

では、空間の「二格」から分析に入りたい。空間次元で用いられる「二格」のうち、静的な[存在点]を除いた(10)(a)～(d)を再考されたい。これらは見かけ上、何ら意味的な統一性がないようにも思われるが、変化主体(自動詞の主格NPまたは他動詞の対格NP)が——程度差をもって——与格NPに近づいていくという点で1つの軸の上に並べることが可能である。この分析に援用すべき概念として、山梨(1994:106-108)が空間の「二格」について提案した〈近接性〉〈到着性〉〈密着性〉〈収斂性〉という4つの認知的制約がある。この4つは独立した要因というより、いわば《一体化》という1つの軸の上で程度差をもった連続体として考える方が実態にあっているように思われる。ここでいう《一体化》とは4つの制約を統括した上位概念であり、4つの制約は次のような階層をなしながら《一体化》の程度差を表す基準として再規定される：

〈近接性〉 → 〈到着性〉 → 〈密着性〉 → 〈収斂性〉

つまり、最も左の〈近接性〉が《一体化》の度合いも最も弱く、右に行くほど《一体化》の度合いが強くなるというものである。これを援用すると、(10)の例で、(10)(a)における「針金」と「内側」の関係は、せいぜい「内側」に近づいているということではかないわけだから最も《一体化》が弱く、〈近接性〉を満たす程度のもので位置づけられる。(10)(b)では「ボール」が「壁」に到着するというのがデフォルト的解釈であるから〈到着性〉のところに位置づけられ、(10)(c)では「ペンキ」が「壁」に到着した上に互いに切り離し得ない状態になるという点で〈密着性〉に位置づけられる。最後の(10)(d)では「調味料」と「スープ」が混ざり合って明瞭な区分がなくなるので、最も《一体化》の度合いが大きく〈収斂性〉を満たしていることができるだろう。

ただし、明確に付け加えておかなければならないのは、決して空間の「二格」が4種類に分けられるのではなく、むしろ《一体化》という性質には程度差があって、4つの基準を援用することで意味役割が一元的に整理できるという点であり、この意味で4つの制約が便宜上の目安にすぎないことを確認しておきたい。

ところで、上述の分析は、従来の記述に訂正すべき点を指摘することにも貢献す

る。「二格」標示の制約として良く知られているのは、田窪(1984:92)が述べているように、動詞「来る」や「行く」などを述語とする移動表現において[着点]が非場所名詞のとき[着点]を「二格」で標示できないというものであり、次のように例示される。

- (13) (a) 花子が公園に来た。
 (b) ?? 花子が太郎に来た。
 (c) 花子が太郎のところに来た。

この例のように「来る」を述語とする動詞句内において、(a)が示すように[着点]が場所としての「公園」であれば「二格」で標示されるのが通常であるが、(b)のように[着点]が非場所名詞になると単純な「二格」形で標示することはできず、(c)のように「の」などを付与することによって場所性を形式的に保証する必要があるとされる。しかしながら、(b)の容認度が落ちることを単に「太郎」という名詞の場所性の問題に帰着させるのは適切でない。(b)が容認不可能になるのは「来る」という動詞が求める〈到着性〉を「花子」と「太郎」では満たし得ないという単純な理由によると考えればよいからである。実際、森山(1988:176)でも触れられているように、移動主体と着点NPが〈到着性〉を満たせば、[着点]NPが非場所名詞であっても「二格」で標示することができる。

- (14) (a) 小さな虫がまた顔に来た。
 (b) 貴方にも手紙が行くはずです。

つまり、移動主体が「小さな虫」や「手紙」のように、相対的にサイズが小さく、人間の身体への〈到着性〉を満たすものであれば、十分「二格」で標示できるのであって、単に「顔」や「貴方」といった名詞の場所性の問題ではないことが確認されると思われる。^[2]

さて、ここで考察対象に加えなければならないのが[存在点]であり、次の例が示すように「二格」の[存在点]は“位置づける”という操作が成立する点で、「デ格」標示と弁別的に異なる。

- (15) (a) 敷地内に小型シェルターを作った。
 (b) 敷地内で小型シェルターを作った。

すなわち、(a)のように「敷地内」を「二格」で標示したとき「小型シェルター」は「作る」という行為の最終局面において「敷地内」に位置づけられると解釈されるが、(b)のように「敷地内」を「デ格」で標示したときは「小型シェルター」の製作が「敷地内」で行われることを示すのみであって、そのまま「敷地内」に位置づけられるとの含意はない。かくて、「二格」による[存在点]は、移動という側面

が前景化されないものの、結果的な側面において〔密着点〕と同じように与格NPに位置づけられるという特徴が認められる点で、〔密着点〕と同質のものとして扱うことができることになる。

かくして、山梨(1994)のいう〈到着性〉〈密着性〉〈収斂性〉〈近接性〉を援用することで、本節で挙げた(10)と(11)は次のように整理することができる。

スケール	空間次元	非空間次元
〈近接性〉	[方向]	[目的]
↓	↓	↓
〈到着性〉	[到着点]	[伝達先]
↓	↓	↓
〈密着性〉	[密着点]	[要素]
	[存在点]	[経験者]
↓	↓	↓
〈収斂性〉	[収斂先]	[結果]

ここで、〔経験者〕というのは知覚文や能力文における「ニ格」であるが、非空間次元で〈密着性〉を満たす用法として位置づけたのは、広い意味で〔存在点〕と同質のもののみなされるからである。これによって、基本的に「ニ格」は一元的に把握されるものと思われる。

3. デ格をめぐる基本的な問題点

第3節では「デ格」の意味分析に基づいて、対格・奪格・与格と併せた暫定的な体系化を提示する。

一般に、格助詞「で」の意味は次のように記述される。

- (16) (a) 太郎が新幹線で福岡へ出張した。 [道具]
 (b) 花子がミスの連続で演奏会を目茶苦茶にした。 [原因]
 (c) ハワイの教会で太郎が花子に指輪をはめた。 [場所]
 (d) この数年で携帯電話の普及率は劇的に増加した。 [時間]
 (e) この工場では輸入オレンジでジュースが作られている。 [材料]
 (f) 1台の車が猛スピードで走り去った。 [様態]

これら意味的に多様な「デ格」を一元的に特徴づけることは難しいと思われるが、結論を先取りしてしまえば、基本的に「デ格」は“動詞の語彙の意味によって変化を被らない”という点を特性として挙げることができる。このことは、次の例が示すように「ガ格」と「ニ格」の関係が動詞の語彙的な意味によって変化を被り得る

ことと対照的である。

- (17) (a) 太郎が課長に なった / 昇進した / 就任した。
 (b) 隊員達が制服姿に なった / 着替えた。

つまり、(a)における「ガ格」の「太郎」は動詞の意味が発動する前においては「課長」ではなく動詞の意味によって「課長」になるという点で、いわば〈-課長〉から〈+課長〉への変化が起こっていると見てよい。同様に、(b)でも「隊員」に〈-制服姿〉から〈+制服姿〉への変化が起こるのは動詞「なる」や「着替える」の語彙的な意味によって起動されることになる。

これに対し「デ格」成分は前景的な「ガ格」成分との関係に変化が起きない。

- (18) (a) 太郎が課長で 終わった / 退職した / 出向した。
 (b) 隊員達が制服姿で 現れた / 整列した / 出動した。

これらの「デ格」は城田(1993:78)が「述語転化補語」と呼んだものであるが、統語的な結合が適切である限りにおいて、(a)に見られる「太郎=課長」の関係は動詞の語彙的な意味にかかわらず常に成立するのであって、(b)でも「隊員達=制服姿」の関係が動詞によって変化することはない。

このように“動詞の語彙的な意味によって変化を被らない”という特性は、次の例が示すように、変化動詞と「デ格」とが直接結び付かないという統語的な制約からも明示的に支持される。

- (19) (a) * 太郎が課長で なった / 昇進した / 就任した。
 (b) * 隊員達が制服姿で なった / 着替えた。

つまり、動詞に広義の変化動詞を代入するとき補語を「デ格」で表示することができず、これにより「デ格」成分が変化の対象になり得ないことが間接的に示されていると思われる。

同様のことは「ヲ格」と「デ格」の間にも言える。

- (20) (a) 太郎が新車を80万で 買った / 売った。
 (b) 花子が代金をドルで 支払った / 計算した。

この場合でも「ヲ格」と「デ格」の関係は不変であり、(a)においては〈新車=80万〉の関係が動詞の語彙的な意味によって変化することはない、(b)においても〈代金=ドル〉の関係に変化はない。

上述の関係が特に重要であると思われるのは、[材料]の格標示における「デ」と「カラ」の差異をも同様の原理によって分析することが出来ると期待されるからで

ある。具体的に問題になるのは、山梨(1995:55-56)が挙げているように、[材料]の格標示が「デ」でも「カラ」でも標示し得るといふ現象である。

- (21) (a) 丸太でカヌーを作った。
 (b) 丸太からカヌーを作った。

当然のことながら、このペアでも知的意味において明確に異なると考えるべきである。すなわち、(a)のように材料を「デ格」で標示したときは、産物としての「カヌー」の中に材料としての「丸太」が何らかの意味で残存しているというような意味合いが強く、乱暴な言い方をすれば「これはカヌーだ」と言える同一の対象に対して同時に「これは丸太だ」とも言える状態にある。これに対して、(b)のように「カラ格」で標示したときは「カヌー」と「丸太」を別の範疇として扱おうという意味合いが強くなる。このことは、次の例において一層はっきりする。

- (22) (a) 妹が毛糸でセーターを編んだ。
 (b) ? 妹が毛糸からセーターを編んだ。

このペアで、[材料]の標示が「デ格」でなければならないのは「毛糸」を材料にして編んだ産物の「セーター」も物質的には「毛糸」に過ぎず、この点で「セーター」は同時に「毛糸」でもあり得る状態として解釈されているためと説明される。

逆に、産物と材料が異なる範疇として扱われるとき、次のペアが端的に示すように、もはや「デ格」で標示することはできなくなる。

- (23) (a) ? 原油で石油を精製する。
 (b) 原油から石油を精製する。

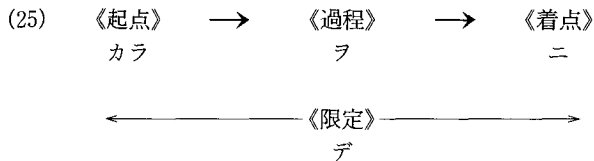
ここで(a)における原料の「原油」を通常「デ格」でマークできないのは、一般に「石油」が「原油」と別の物質として扱われるからこそ両者に異なる名称が与えられているからであって、上述の言い方をすれば「石油」が同時に「原油」であり得ないためと説明される。かくして、[様態]も[材料]も、同一の対象から異なる側面を取り上げるという観点から言えば本質的に変わりなく、この点で、[材料]は[様態]のバリエーションと扱ってよいものと思われる。

さらに、上述の分析は空間の「デ格」でも有効である。空間次元では“主格NPまたは対格NPが「デ格」の場所に存在するという関係が、事象を通じて変化しない”と特徴づけることができる。このことは、次の例から具体的に示されよう。

- (24) (a) 太郎が公園で 散歩する / 逃げ回る。 [太郎 in 公園]
 (b) 太郎が公園で 生活する / 調査する。 [太郎 in 公園]

すなわち、(a)のように移動動詞を用いたときも(b)のように非移動動詞を用いたときも「ガ格」の「太郎」が「デ格」の「公園」にいるという関係は不変であり、如何なる状況を想定しても“太郎が公園に所在しない”ような解釈は決して成立しない。しかも、この含意は(a)でも(b)でも変わらないため、動詞の語彙的意味に依存しないと断言していい。^[3]

以上から「デ格」は、どの意味役割においても“動詞の語彙的意味によって変化を被らない”と特徴づけることができ、第1節の図(9)に接続させる形で図示すれば次のようになる。



つまり、動詞によって表される事象において「カラ格」「ヲ格」および「ニ格」が各々《はじまりの部分》《はじまりと終わりまでの間》および《終わりの部分》をプロフィールするのに対し、「デ格」は《動詞の語彙的意味によって変化を被らずに限定するもの》として範疇化するというものである。これにより、暫定的なものながら「デ格」を含めた主要な格4つを体系化することができたと思われる。

4. 結語

本稿では、現代日本語の「ヲ格」「ニ格」「カラ格」および「デ格」について、意味的な観点から特徴づけた上で、暫定的に図(25)のような体系化を提示した。

最後に、主格(ガ格)と対格(ヲ格)の関係について触れておきたい。主格と対格については、自他交替において客観的には同一の意味役割が与えられるほか、主格と対格だけが原理的に変化を被るものを標示することができるという共通の特質ももつ。しかし、菅井(1993)で述べたように、主格は、格成分の中で「最も顕著(the most salient)」な成分であり、その生起において他の格成分を前提としない点で完全に自律的である。他方、対格は、菅井(1995)で述べたように、意味的に主格と対極的に位置づけられ、常に主格を前提とする。この点で、対格は主格に対してのみ依存的であり、主格と対格は意味的に差別化されることになる。

注

[1]本稿は、限られたスペースで、4つの格の体系化を示すところまで議論を進めなければならないという事情があり、細部の検証は割愛した。それぞれの格に関する詳細な議論は、菅井(1997, 1998, 2000)を参照されたい。

[2]要するに, NPが場所として認められるかは究極的に言語話者の解釈に帰着されるというのが本稿の立場である。

[3]もちろん, 極性が否定であれば事情は異なる。つまり「太郎は公園で遊ばなかった」のように否定モードにおいては「太郎は公園にいた」が含意されるとは限らない。

参考文献

- 国立国語研究所 1997『日本語における表層格と深層格の対応関係(国立国語研究所報告 113)』三省堂。
- 城田 俊 1993「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版, pp.67-94。
- 菅井三実 1993「構文スキーマ理論序説」『人文科学研究』第22号, pp.33-50。
 1995「対格の意味特性に関する覚書」『日本語論IV・言語の変容』和泉書院, pp.133-154。
 1997「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43), pp.23-40。
 1998「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』130(文学44), pp.15-29。
 2000「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻・第2分冊, pp.13-24。
- 田窪行則 1984「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』第12号, pp.89-117。大阪外国語大学。
- 森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院。
- 山梨正明 1994「日常言語の認知格モデル[4]——認知的視点の投影と言語理解」『言語』第23巻・第4号(1994年4月号), pp.106-111。
 1995『認知文法論』ひつじ書房。
- Heine, B., U. Claudi, and F. Hünemeyer
 1991 “From cognition to grammar: evidence from African languages,” In Traugott, E. C. and B. Heine (eds.) *Approaches to grammaticalization*. Vol.1. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 149-187.
- Johnson, M. 1987 *The Body in the Mind*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

(すがい かずみ・兵庫教育大学)